省察的実践を促進するスーパービジョン機能の検討

―スクールソーシャルワーク実践に特化して―

加藤由衣[1]

（2017年９月27日受付，2017年11月17日受理）

A Consideration of Supervision in Promoting Reflective Practice：Focus on School Social Work Practice

Yui KATO

（Received : September 27. 2017，Accepted : November 17. 2017）

要　旨

ソーシャルワーク実践において，省察や省察的実践が注目されているが，定義の曖昧さや促進要因の不明確さから，省察的実践家の育成には課題がある．そこで本稿では，スーパービジョンの特徴に着目し，その機能の検討から，省察的実践の促進に寄与するスーパービジョンの役割を明らかにすることを目的とした．スーパービジョン機能の検討からは，スーパービジョンが省察の力の向上と実践レパートリーの広がりの役割を担うとともに，ハード・ソフト面での環境整備において意義があることを示した．そして，スクールソーシャルワークのスーパービジョンにおいて，①省察的実践家の育成，②スクールソーシャルワーク実践システムの変革・確立，③省察を促進する環境づくりが求められることを指摘した．

キーワード：スクールソーシャルワーク，省察的実践，スーパービジョン

Abstract

Reflection and reflective practice are topics drawing attention in social work practice, but the development of reflective practitioners remains an issue due to ambiguity of definitions and lack of clarity regarding promoting factors. This paper focused on supervision characteristics and examining their function in order to clarify the role of supervision in contributing to promotion of reflective practice. Examination of supervision functions showed that supervision not only has a role in improving reflective competence and widening the practice repertoire, but is also significant in improving hard and soft aspect of the environment. In terms of supervision in school social work, the need for the following was pointed out: (1) development of reflective practitioners, (2) reform and establishment of a school social work practice system, (3) creation of environments that promote reflection.

Key Words: school social work, reflective practice, supervision

[1] 高知県立大学社会福祉学部社会福祉学科・助教・博士（福祉社会学）　Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, University of Kochi, Teaching Associate（Ph. D.）

Ⅰ　はじめに

省察的実践は，Schön（1983）が，普遍性・論理性・客観性を特徴とする近代科学の専門職モデルへの批判から，新たな専門職モデルとして提示したものである．それは，ソーシャルワークのみならず，教師や看護などの対人支援専門職のなかで注目されるようになり，わが国のソーシャルワークにおいても，その重要性が言及されている．

しかしながら，省察的実践には暗黙的な要素が多く，省察的実践をいかに促進し，省察的実践家を育成していくかという点では課題が多い．そのなかで，スーパービジョンは省察との関連が深く，省察の促進や，省察的実践家としてのソーシャルワーカーの育成への貢献が期待できると考えた．

そこで本稿では，スーパービジョンに着目し，ソーシャルワーカーの省察的実践を促進するための役割を探究していきたい．特に本稿では，スクールソーシャルワーク（以下，SSW）に焦点を当てて検討を進めていく．その理由は，スクールソーシャルワーカー（以下，SSWer）が学校現場に唯一の社会福祉専門職として参入し，利用者の複雑な状況に対応しながらも，単独で実践する状況の多いことがあげられる．そのためSSWerには，自己との対話や状況との対話によって省察し，そのなかで専門的判断を行う省察的実践家の思考スタイルが，特に必要と考えられる．そこで，スーパービジョンによる省察的実践の促進の可能性を考察し，わが国のSSW実践における省察的実践の発展の手がかりを模索していきたい．

Ⅱ　スクールソーシャルワークにおける省察的実践とスーパービジョン

1．省察的実践の重要性

省察の概念自体は決して新しいものではなく，Deweyの研究の貢献があげられている（南2007；Brockbankら2007）．具体的には，「ある未確定な状況に巻き込まれて混乱した状況下における何らかの経験をし，そこで何が起こっているのかを探索・分析し，問題は何かを明確化し，それを解決するための仮説を立て，実際に行動することによって仮説を検証する」（南2007：５）という省察的思考のプロセスが，Deweyによって示された．つまりDeweyは，教育における経験の意義に着目し，経験に対する意味づけや，次の行動へと導く仮説とその実行・検証という一連の活動として省察を提唱したのである．

そして，省察が対人支援専門職のなかで広く注目されるようになったのは，Schönによって「省察的実践家」という専門職モデルが提起されたことが大きい．Schönは，近代科学を至上とした技術的合理性という専門職モデルに替わる新たな専門職モデルとして，省察的実践家を提起した．そのなかでSchön（1983：50）は，実践者が不確実性と不安定さ，固有性のある状況や，価値観の葛藤が生じている状況に適切に対応する際の「わざ（artistry）」の中心は，行為のなかの省察（reflection-in-action）というプロセス全体にあるとして，省察の重要性を説いた．また彼は，多様で変化・変容する生活状況に対応するソーシャルワーカーなどの専門職は，自身の実践活動をふり返ったり，実践を行いながら省察したりする実践的思考のスタイルにこそ専門性があると主張したのである．

Schönの研究以降，対人支援の領域において，省察や省察的実践が強調されるようになってきた．そして，近年のわが国におけるソーシャルワークの研究動向をみても，その重要性が言及されてきている（須藤2009；空閑2012；渡部2016）．たとえば空閑は，「『行為の中の省察』を通して得られた気づきや発見を，より良いかかわりのアイデアや今後の援助のヒントにしていくことによって，複雑で，不確実で，曖昧で，しかしそれゆえに多義的なクライエントの独自の生活状況に向かう営みが可能になる」（空閑2012：９）として，その意義を強調している．また須藤（2009）は，ソーシャルワーカーの実践のなかに，省察的実践家モデルの実践的思考能力を見いだしている．

こうしたなかで，SSW実践においても省察的

実践家の実践スタイルは，重要な意味をもつ．それは，SSWer が唯一の社会福祉専門職として学校に参入しており，日々の活動のなかで，同じ視点から子どもや家庭の状況を把握し，その場で支援を検討できる同僚や仲間がいない状況に関連する．つまり，ひとり職種として活動するなかで，子どもや家庭の固有な生活状況と，あるいは自分自身と対話を重ね，省察しながら活動していくことが重要と考えられるのである．

以上の状況をふまえて，SSW における省察的実践の意義は，以下４点にまとめられている（加藤2016）．

① SSW 実践における帰納的な実践モデルの探究を促進すること
② 教育現場という異なる文化に属するなかで，多角的な視点での現状把握を可能にすること
③ 学校，SSWer が子ども・家庭に与える影響への視座が定着すること
④ 社会システムなど多様なシステムの相互影響を含めて子ども・家庭のエンパワメントを促進すること

このように，SSW 実践を含めたソーシャルワーク実践全体において，省察的実践の重要性が認識されてきている．しかし一方で，省察の定義や構造の曖昧さゆえに，省察を促進したり抑制したりする要因や変数が明らかにされていないこと（Wilson2013：157）や，実験に基づくデータが存在していないこと（Ixer2016：819）などが問題として指摘されている．また，省察的実践を構成する要素や省察的実践がどのように現実化されるかが不明確なことも，課題にあげられている（Ruch2002：199）．このことは，省察や省察的実践という言葉が独り歩きするばかりで，実践で効果的に機能しない危険性を孕んでいる．そのため，省察的実践家がいかに育成され，省察の力の向上が何によってもたらされるのかを明確にすることは，大きな課題といえよう．

こうしたなかで，省察的実践や省察は，しばしばスーパービジョンと関連づけて言及されるようになり，スーパービジョンの文献でも省察に関する記述がみられる．具体的に，Hawkins ら（2012：12）は，『Supervision in the Helping Professions』第４版のなかで，はじめてスーパービジョンに不可欠な要素の一つとして省察を取りあげている．また Weld（2012：21）は，スーパービジョンを，省察的実践プロセスをとおして学習に従事する機会としており，スーパービジョンそのものを省察的実践と捉えていることがわかる．

以上のように，省察的実践や省察とスーパービジョンが関連深い概念であるならば，スーパービジョンの特徴を検討することで，省察を促進する要素や省察的実践家育成への手がかりが見いだせると考えた．そして，それを明らかにすることは，SSW における省察的実践の発展に貢献できると考えている．

２．スクールソーシャルワークにおけるスーパービジョン

スーパービジョンの検討に移る前に，現在 SSW 実践や研究のなかで，スーパービジョンがどのように位置づけられているかを整理しておきたい．文部科学省は，SSWer 活用事業開始当初から，事業内容の一つとして，SSWer を指導・援助するスーパーバイザーの配置を明記している（文部科学省2016）．特に，SSWer の職務や勤務形態の特殊性ゆえに同じ専門職からの助言・指導が受けづらいため，教育委員会へのスーパーバイザーの配置が必要とされている（文部科学省2017）．また門田ら（2012）は，SSW におけるスーパービジョンの目的を，学校現場での単独配置ゆえのストレスへの対応，安定した専門的支援の質の維持や専門性の向上としている．

これらの指摘から，SSW でスーパービジョンが重視される理由は，学校現場に唯一の福祉専門職として，子どもや家庭の生活を支える役割を担っていることが大きいと考えられる．そこでは，教育という異なる文化に属しながら，福祉の

視点からの判断や活動が求められているため，ソーシャルワークという同じ立ち位置からのスーパービジョンが不可欠なのである（鈴木ら2015）．

また，SSWer が関わるケースには，学校が対応しきれなくなって SSWer に活動の要請がくるものもある．あるいは，SSWer の重要な役割である関係機関との連携が必要なケースでは，複雑な生活問題が潜んだハイリスクなものも多い．つまり SSWer は，複雑な生活問題やハイリスクな状況を抱えた家庭の支援という，高いレベルの専門性が求められるのである．

こうしたなかで，SSWer を支援し，その成長を支えるスーパービジョンは大きな意味をもつ．そのため，近年の SSW の研究においても，スーパービジョンの重要性が指摘されている．しかしそれらは，実施状況やソーシャルワークにおけるスーパービジョンの研究動向の調査など，現状を明らかにするものが多い（門田ら2013；大友2016）．あるいは，スーパービジョンを含めた SSW 実践システムの構築を提案した研究がみられる（山野2015）．しかし，事例的に紹介するものを除いて，スーパービジョン方法を論じているものはほとんどないのが現状である。

一方でスーパービジョンの実施状況をみると，日本学校ソーシャルワーク学会が実施したアンケート調査では，都道府県と市町村の差や地区による差がみられるものの，約半数（47.8%）の自治体でスーパービジョンの機会を整備しているとの結果が示されている（日本学校ソーシャルワーク学会2016）．この調査より５年前の2010年の調査（土井2011）では，スーパービジョンを実施している自治体が35.4%だったことから，スーパービジョンの実施状況は，増加傾向にあると考えられる．

もちろんなかには，他職種によるスーパービジョンや，必ずしもその内容がスーパービジョンといえないものも存在する[1)]．また現状では，事例検討をとおしたケースに関する助言など，スーパービジョンの教育的機能を中心としたものが多い（門田ら2013）．そのため，スーパービジョン・システムの構築や，管理的機能を発揮できるシステムの必要性が言及されている（山野2010；宮嶋2016）．

このようにまだ課題は多いものの，文部科学省の報告などもあり，SSW 実践においては，公のスーパービジョンの機会が今後も増加することが期待できる．そのため，スーパービジョンの機会を用いて，省察的実践を促進することができれば，SSW 実践のさらなる発展に貢献できると考えられる．

３．スーパービジョン機能の検討の意味

すでに言及してきたように，スーパービジョンは，省察的実践や省察と関連深いものと考えられている．この背景には，省察的実践や省察への機運の高まりのなかで，スーパービジョンの特徴にその要素が見いだされたことがあげられる．たとえばスーパービジョンプロセスの研究では，しばしば体験学習モデルが活用されている（Hawkins ら2012；Howe ら2013；Wonnacott2016）．この体験学習モデルは，「経験・体験」「観察・省察」「分析・概念化」「行動」の局面が循環的に展開されるもので，局面の一つに省察が含まれる．つまり省察は，スーパービジョンのプロセスの一部にそもそも含まれているのである．

一方で，スーパービジョンの機能や方法のなかに，省察の特性がどのように反映されているかに関しては，十分検討されていない．しかし，省察的実践を促進する方法としてのスーパービジョンの役割を明らかにするためには，スーパービジョンと省察との具体的関連や，スーパービジョン機能のなかにみられる省察の特性を明確にする必要があるだろう．それにより，省察的実践を促進する方法が提示できると考えられる．

そこで本稿では，文献研究をとおしてスーパービジョンの機能や展開を検討することで，そこに含まれる省察の特性を明らかにしていきたい．具体的には，まずスーパービジョン機能に関する先

表１　３つの主要機能

Hawkins and Smith	Proctor	Kadushin
発達（Developmental）	成長・発達（Formative）	教育（Educational）
援助（Resourcing）	修復（Restorative）	支持（Supportive）
質的（Qualitative）	規範（Normative）	管理（Managerial）

行研究から，各機能の役割を整理していく．そのうえで，省察や省察的実践にかかわる先行研究をふまえて，各機能の役割や内容にみられる省察の特性を分析する．そして，スーパービジョンによって省察がいかに促進され，省察的実践を可能にしていくかを示し，SSW におけるスーパービジョンの可能性を提示していきたいと考えている．

なお現状では，SSW のスーパービジョンに特化した文献は非常に少ないため，ソーシャルワーク及び福祉専門職のスーパービジョンに関する文献を対象に，機能の検討を進めた．また，スーパービジョン機能は，研究者によってさまざまな呼称でまとめられており，その代表的なものが表１である[2)]．表１に示されるとおり，主要なスーパービジョンの機能には，①スーパーバイジーの発達や教育に焦点化したもの，②組織の望ましい状態や実践の質の保証を目指したもの，③スーパーバイジー自身を助け，支持する役割を果たすものがある．これらの機能は研究者によって呼称が異なるが，本稿では，最も認知されている Kadushin（2014）による①教育的機能，②管理的機能，③支持的機能という名称を用いて検討を進めていく．

Ⅲ　スーパービジョン機能における省察の特性

１．教育的機能

まず，①教育的機能にみられる省察の特性の整理から始めていきたい．省察に関しては，学ぶために省察し，あるいは省察の結果として学ぶ（Moon2004：80）といわれるように，一般的に，思考や学習と関連の強い概念である．そのため，スーパービジョンの教育的機能と省察は，非常に親和性が高いといえる．

たとえば，教育的機能はスーパーバイジーの利用者との実践に関する省察や探究をとおして遂行される（Hawkins ら2012：62）．また，教育的機能に焦点化したスーパービジョンは，ガイド付きの自己観察の機会であり，行ったことに関するシステマティックで内省的・回顧的な吟味や，「静かな状態のなかでの想起」のような実践に関する思考の機会といわれる（Kadushin ら2014：106）．特に近年では，教育的機能の役割が，伝統的な知識やスキルを教えることから，省察的実践家として生涯発展するという全体的な目的の維持機能へと転換してきているとの指摘もある（Beddoe ら2016：26）．

これらの説明から，教育的機能は，スーパーバイザーに導かれながら，スーパーバイジーが主体的に自身の実践を省察し，学びを深めていく役割と理解できる．つまり，教育的機能自体が，省察という特性によって成り立っているのである．

また，Weld（2012）はスーパービジョンによる個人の実践理論の構築を図１のように表している[3)]．この図では，実践や経験，理論や思考，あるいは直観などの暗黙的な要素から，スーパーバイジーが自らの実践理論を築くのをサポートするスーパービジョンの役割を表している．そこでは，実践に含まれる暗黙知を表出し，他者と共有できる形にするための，スーパービジョンの役割が重視されている．

こうした暗黙的な要素の言語化は，省察の特性と一致するもので，実践知や暗黙知を明確な知識へと転換するのを助ける省察の役割についての言及がみられる（Moon2004；Ruch2005）．たとえば，省察的実践は，実践者が実践に埋め込まれた知識を取り出すことで，実践の理論化を可能にすると

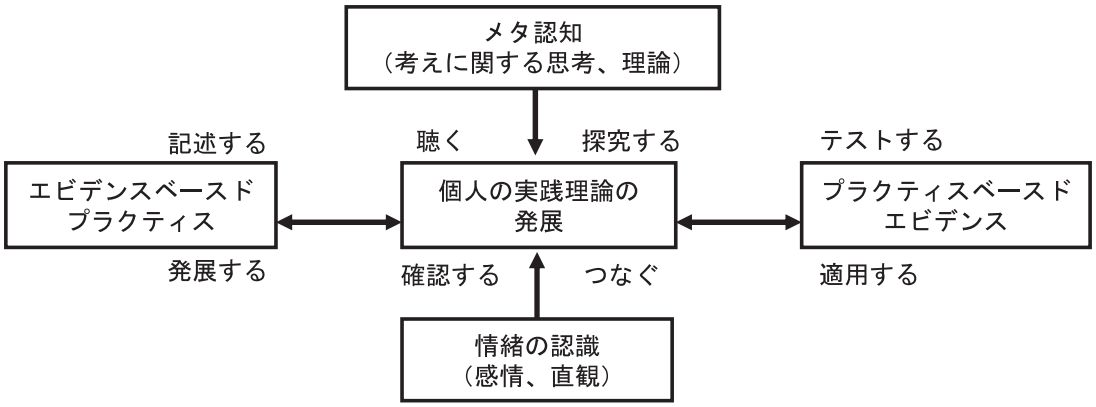

図１　スーパービジョン－個人の実践理論の構築

いわれている（Ruch2005：116）．また McAlpine らによると，経験知や暗黙知を，原理に基づく形式知へと転換するためには，意味を理解するための意図的な省察と，改善を目的とした経験からの学習が必要とされる（Moon2004：81）．このように，実践知や暗黙知の言語化は，省察的実践や省察の特性であるとともに，スーパービジョンがそれを促進する役割を担っていることがみてとれる．

これまで言及してきた，スーパービジョンのなかで実践についての省察を深めたり，実践知や暗黙知を言語化したりする役割は，Schön が提示した「行為についての省察（reflection-on-action）」に該当し，過去あるいは現在の実践をふり返るものである．一方でスーパービジョンには，未来の実践に向けて対応策を検討する側面も含まれる．

Wonnacott（2016）は，スーパービジョンを「経験」「省察」「分析」「計画と行動」が循環するプロセスとしてまとめており，「計画と行動」を未来の行動の準備や実行をする局面として描いている．他にも，福山（2005）がスーパービジョンのステップをまとめた FK モデルや，Davys ら（2005）のスーパービジョンの省察学習モデルにおいて，今後の具体的対策や戦略を練る局面が示されている．

こうした未来の実践を検討する側面について，De Haan（2012：93）は，スーパービジョンセッションがそもそも省察的であり，未来に向けた新たな観点や見解，アイデアを導くこと，スーパーバイジーがこうした省察を未来の行為へと転換することに言及している．そして Hawkins ら（2012：76）は，De Haan の主張をふまえて，「reflection」に対する未来志向の概念として「preflection」を提示した．

Hawkins らの preflection の概念化をみると，省察自体には未来志向の考え方がないとも捉えられる．しかし Schön（1983：140）によると，省察的実践を特徴づける「わざ」は，未知の状況にもちこまれるレパートリーの幅と多様さであると説明されている．つまり，省察的実践には，未来の実践に活用できるスキルや実践知を保持することが不可欠なのである．

そして，これらのレパートリーを貯めていく役割が，スーパービジョンの教育的機能による新たな観点や知識，スキルの獲得，すなわち preflection にあると考えられる．こうしたことから，教育的機能では，これまでの実践や経験をふり返りながら省察や探究を深め，実践知や暗黙知を言語化していく側面と，未来の具体的対策や戦略を検討するなかで，実践で活用できるレパートリーを増やしていく側面が存在するのである．そしてこの２側面に，省察的実践の促進に寄与する教育的機能の特徴があるとまとめられる．

２．管理的機能

次に②管理的機能は，Kadushin ら（2014：53）

表２　スーパービジョンの主要な焦点

主な焦点	機能
スーパーバイジーが実践の内容やプロセスを省察する空間を提供する	発達
実践のなかでの理解やスキルを発展させる	発達
実践に関連する情報や異なる観点を受け取る	発達／援助
内容やプロセスに関するフィードバックを受け取る	発達／援助
人としてや実践者として認められ、支持される	援助
人として実践者として、困難や問題、計画を無用に一人で実行することがないようにする	援助
実践から生じる個人的な苦悩や再刺激、転移や逆転移を表出し、探究する空間をもつ	質的／援助
個人的・専門的な資源を計画的に、適切に活用する	質的／援助
受身の行動よりも先を見据えた行動をする	質的／援助
実践の質を保証する	質的

によると，機関の管理上の目標を達成するために，量的・質的の両面において機関の方針や手続きに従う方法で，職場や機関の設備，人材を整えることである．一見すると管理的機能は，教育的機能と比べて，省察との関連がみえづらい．しかし管理的機能には，組織というシステムとスーパーバイジーとの関係性の点から，省察を促進する役割があると考えられる．そこで，スーパーバイジーを取り巻くシステムに着眼し，検討を進めていきたい．

Hawkins ら（2012）は，スーパービジョンの主要な焦点とそれらが関連する機能を表２[4]のように整理している．管理的（質的）機能には，表２に示されるとおり，利用者に対する実践の質の保証や，資源の適切な活用といった，機関としての社会的責任の遂行という側面がある．それと同時に，スーパーバイジーが苦悩などを表出できる空間の確保や職場内の関係に着目した環境整備の側面を有している（Hawkins ら2012；植田2015）．

特に植田（2015）は，職場の現状を把握し，組織の改善策の作成や働きかけを行うスーパービジョンの役割を述べており，こうした環境や基盤づくりがスーパービジョンの一環であるとしている．また Noble ら（2016）も，管理的機能の一つとして，システムの変革を選択肢に入れることを指摘している．さらに Ingram ら（2014：133）は，スーパービジョンで省察を促進する空間や時間，文化を見つける機会は，経済や効率，効果に焦点化する管理的機能によって補われるとし，省察の土壌づくりとしての管理的機能の意義に言及している．

このように，管理的機能には，スーパーバイジーを取り巻く組織という環境に視野を広げ，そのなかでスーパーバイジーが有効に機能する方策を検討する役割がある．そこには，省察の機会や省察的実践を認め，促進する組織や文化を創ることも含まれるのである．

省察を促進する環境要因について，たとえば Yip（2006：781）は，適切な状況における自己省察がソーシャルワーカーの専門的発展に役立つと述べており，適切な状況の一つに支持的環境をあげている．そして彼は，同僚やスーパーバイザーを含めた支持的な組織の状況が，支持的環境に含まれるとしている．また Bolton（2014：15）は，省察の障害の一つとして，疲労や過労，時間のなさ，他にすることが多すぎることをあげている．Bolton の指摘を言い換えれば，スーパービジョンの管理的機能によって，業務量の調整や省察する時間を設けることが，省察の促進につながると考えられる．こうしてみると，省察を促進する環境要因はスーパービジョンの管理的機能の役割と一致しており，管理的機能が省察を促進する組織や体制を整える特徴を有していると理解できる．

また環境という点に特化してみると，ソーシャルワークでは，人と環境への視座から，ソーシャルワーカーの所属する実践機関に関するアセスメ

ントや，実践機関への働きかけによる間接的インターベンション，利用者支援のなかで明らかになった課題の実践機関へのフィードバックが展開される（Johnson ら2010；太田ら2005）．つまり，ソーシャルワークの利用者支援において，機関の体制や機能が利用者の生活状況に与える影響の把握は不可欠なのである．それゆえ，ソーシャルワークにおける省察は，ソーシャルワーカーの所属する機関への視座を含むことは必然といえるだろう．このことから，スーパーバイジーと組織の相互作用に着目する管理的機能は，人と環境の視座から支援を展開するソーシャルワークにおいて，環境への省察の促進に貢献すると考えられる．

さらに Lymbery ら（2007）は，活用する理論に疑問や疑いを抱き，思考や行動の理由を考えることで，世界の捉え方や理解の仕方にラディカルな変化を起こすことができるとし，このプロセスは質的（管理的）スーパービジョンの特徴であるとしている．Lymbery らの指摘には，近年しばしば言及されている批判的省察（critical reflection）の特性がみてとれる．批判的省察は，既存のシステムのなかでより効果的あるいは生産的に機能する方法に焦点を当てるのではなく，システムそのものの基盤や原則へ疑問を投げかけ，その道徳性を評価し，代替案を検討することである（Brookfield2009：297）．つまり，自らが身を置く組織に無批判に適応するのではなく，組織を批判的な視点で見つめ，変革する姿勢をもつことが，管理的機能の一つの働きと考えられる．管理的機能のこうした働きを促進することで，批判的省察の視点は育成されるであろう．

以上の整理と分析から，スーパービジョンの管理的機能には，省察を促進する組織を整備することと，環境に対する省察，特に組織に対する批判的省察を促進する役割があるとまとめられる．

３．支持的機能

最後に③支持的機能は，スーパーバイジーのストレスや士気，業務への満足度に関連するものである（Lymbery ら2007：231）．支持的機能の主な課題となるスーパーバイジーのストレスは，組織の体制や状況，業務内容から生じるものや，利用者支援のなかで発生するものなどがある．そのため支持的機能は，これらストレスの発生要因への対応とともに展開され，教育的機能や管理的機能を伴うことが多い．先述の表２をみても，援助（支持的）機能の多くは，発達（教育的）機能や質的（管理的）機能とあわせて遂行されていることがわかるだろう．こうした側面について Kadushin（2014：160）は，管理的機能と教育的機能が効果的に仕事を遂行するための能力を高める手段的要素（instrumental component）となる一方で，支持的機能は仕事へのコミットメントや動機づけを高める感情表出の要素（expressive component）であると述べている．

このように，支持的機能は実践のなかでの問題・課題に伴うストレスに対応し，感情表出を促す役割がある．この点について省察の観点から検討すると，省察を行ううえでの不安や否定的感情への対応の重要性が言及されている．たとえば Schön（1983：56）は，直観的な行為のなかで驚きや喜び，期待が生じたり，あるいは望ましくないことが発生したりすると，行為のなかの省察によって，その状況に対応すると説明している．Schön の説明からは，実践での肯定的な驚きとともに，ストレスの要因となりうるマイナスの感情も省察の起点となることがわかる．しかし，望ましくないことを受けとめたり，実践に対して疑問をもったりすることは，不安を伴うと考えられる．そのため，省察的実践では，不安を積極的に受け入れる姿勢の重要性が唱えられている（Ruch2002）．

また，Bolton（2014）は省察的実践に求められる姿勢の一つとして，「寛容と誠実さ」をあげ，探究の精神を高めようとエネルギーや時間を費やし，深く関与していくことと，それにより他者や自分自身からの刺激や経験を受け入れるようになることの意義を説いている．これらの指摘をふま

えると，省察に対する不安や，探究，経験にオープンであることは，省察の基本姿勢と理解できる．そして，スーパービジョンの支持的機能が，スーパーバイジーの不安の表出や認識を支えることができれば，スーパーバイジーが省察的実践の土台となる姿勢を獲得するのに寄与できる．

その他にも，省察的実践では，自らの感情に向き合い，感情に関する省察を行う必要性がしばしば言及されている（Knott ら2013；Bassot2016）．たとえばBassot（2016）は，省察的実践が日々の実践のなかで自身の感情に向き合うことを含むとし，感情に波長を合わせることが専門的実践の重要な要素であると述べている．特にそこでは，否定的な感情に向き合う必要性が指摘されている．またRuch（2000）は，省察学習の４類型の一つに過程省察（process reflection）をあげ，無意識のうちにある感情や思考，利用者との相互作用のなかで生じる反応に対する省察の重要性を強調している．

このように，省察的実践や省察を深める学習では，利用者支援などのなかで生じる感情に向き合い，その感情の意味を深めていくことが求められる．そのため，スーパービジョンの支持的機能によってその役割が果たされるのであれば，省察を促進する支持的機能の意義が見いだせる．特に，否定的な感情に向き合うことは，困難さが伴うと考えられるため，スーパービジョンでスーパーバイザーに支えられながら，否定的感情に向き合い，対処する方法を獲得できる意味は大きいだろう．

さらに，スーパーバイジーの内的側面への着目に関して，スーパービジョンでは，自分の感じ方の傾向や苦手意識，性格，価値観とその出どころを知り，それらを脇において利用者とかかわることができるようにする自己覚知を支えることが重要とされる（植田2015）．つまりスーパーバイジーは，支持的機能をとおして自らの内的感情に気づき，それを整理し，専門職としての自己を形成していくのである．この自己覚知という点についても，省察的実践の基盤には，自己理解や自己覚知が重要であることが示されている（Ruch2002；Yip2006；Gray ら2013）．具体的にYip（2006：778）によると，省察は自身の行為について気づくことからスタートし，行動における思考や感情の背景にある思想や考えについて批判的に評価することへと深化していく．つまり，省察的実践の中心にある省察は，自らの行動の背景を認識し，理解していくことであり，それこそが自己覚知といえる．ゆえに，支持的機能が自己覚知を促す役割を担っているという点で，省察的実践家の育成の要素が含まれると考えられるのである．

これまでの整理から，支持的機能には，省察的実践に不可欠なスーパーバイジーの感情表出を励まし，感情への気づきや認識を支え，自己覚知を促す役割があると理解できた．そしてこれらは，スーパーバイザーという他者からの直接的な働きかけによってもたらされるもので，スーパービジョン関係が重要な意味をもつ．たとえば山辺（2015：27）が，支持的機能は「スーパーバイザーとスーパーバイジーの間の信頼関係を背景とした『スーパービジョン関係』を基盤として遂行される」と述べるように，他の２機能以上にスーパーバイザーとスーパーバイジーの関係が重視されるのである．

一方，省察を深めるためにも，他者との相互作用による環境の重要性が述べられている．具体的には，省察に必要な環境として，リラックスして不安から解放されていることや，抑圧的な態度が許されないこと，自分が尊重されているとわかることなどがあげられている（Beverley2007：114）．これらは，他者との直接的関係のなかで創られる環境要因と考えられる．こうしてみると，管理的機能が組織やシステムという側面から省察を促進する環境づくりに寄与するのに対して，支持的機能は，特にスーパーバイザーとスーパーバイジーの関係性をとおした，省察促進のための環境要因を担っているといえる．

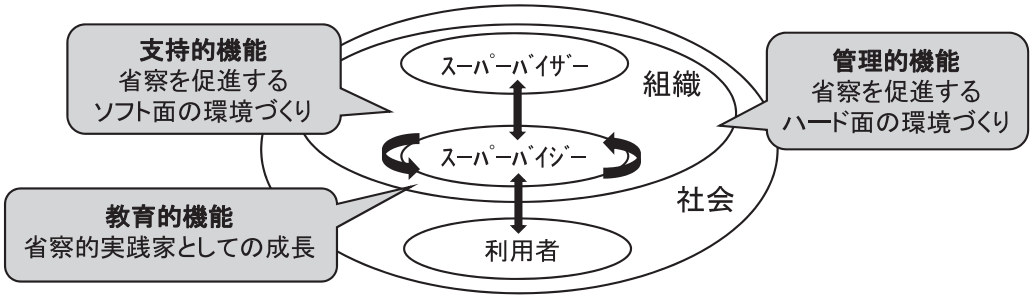

図２　省察的実践を促進するスーパービジョンの役割

Ⅳ　省察を促進するスーパービジョンの意義

１．省察的実践家としての成長と環境整備

スーパービジョン機能を省察という視点から検討してみると，スーパービジョンには，省察的実践家としての成長を促す役割がみられた．また，組織・基盤というハード面と，スーパービジョン関係をとおしたソフト面で，省察を促進する環境づくりの役割があることがみえてきた（図２参照）．そこでここでは，これまでの検討をふまえて，省察を促進するスーパービジョンの意義をまとめていきたい．

ソーシャルワーカーが省察的実践家として機能するためには，何よりもまず，実践のなかで省察できる力を身につけていく必要がある．それはSchönのいう「行為のなかの省察」を行う力を身につけていくことである．しかし，「行為のなかの省察」は暗黙的でみえづらい．そのため，スーパービジョンでのふり返りをとおして「行為についての省察」を行い，省察の力を養っていくのである．

またDe Haan（2016）は，スーパービジョンのなかで自分の省察について省察する必要性を述べている．つまり，スーパービジョンで実践をふり返るなかで，「なぜそのように実践したのか」「どのような思考が自分の実践行為に影響したのか」などを掘り下げ，「行為のなかの省察」を言語化していくのである．このようにスーパービジョンで省察を深めることで，省察の力の向上や，省察的実践に含まれる実践知を，形式知へと転換していくことができると考えられる．

そして，スーパービジョンでの未来の行為や実践の検討が，実践で活用できるレパートリーの広がりにつながることは，すでに指摘してきた．省察的実践家には，一方で省察の力が求められ，他方でSchönが指摘した「行為のなかの省察」を展開するためのレパートリーが不可欠である．そのため，スーパービジョンをとおした実践のふり返りと未来の対応策の検討という側面は，図３に示すように，省察的実践家を育てていくために必要な２側面ととらえられる．

近年のスーパービジョン研究では，スーパーバイザーから教えられ，管理されるといった受動的なスーパーバイジーから，省察し，自ら探究する能動的なスーパーバイジー像が描かれている．そのなかでHawkinsら（2012：16）は，スーパービジョンがもたらす利益の一つに，スーパーバイジーが「自分のなかのスーパーバイザー」になることをあげている．それは，困難な状況のなかで省察し，思慮に富んだ対応をすることと説明されており，まさに省察的実践家になることと理解できる．そして，それを育成するスーパービジョンの役割は，図３の過去の省察と未来志向の省察をとおして果たされるのである．

また，３機能の検討からは，実践のなかで生じる感情などのスーパーバイジーの内的側面から組織の影響など，ミクロからメゾへと広がる省察が，スーパービジョンに期待されると考えられる．特に管理的機能では，所属する組織の体制への批判的なまなざしの可能性が見いだされた．さらにスーパービジョンでは，組織だけでなく社会状況

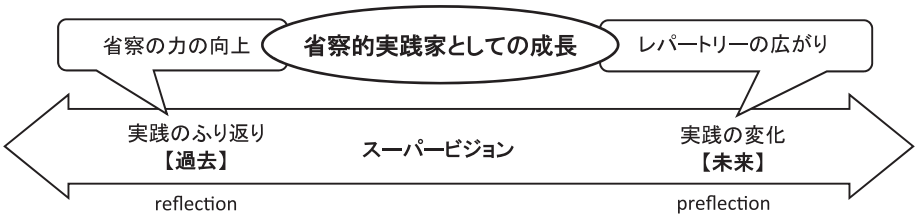

図３　スーパービジョンをとおした省察的実践家の発展

や社会規範，専門職倫理などスーパービジョンを取り巻く広い状況への視野の必要性が言及されている（Lymbery ら2007；Hawkins ら2012）．このように，スーパービジョンをとおして，自らの組織や社会システム，専門職システムなどが利用者支援に与える影響への省察が行われるのであれば，批判的に省察する姿勢の育成にもつながるであろう．

こうした批判的な視点は，社会へと視野を広げる一方で，自らの内へのまなざしにも活かされる．具体的に，教育的機能でみてきたように，スーパービジョンは個人の実践理論を構築していく役割をもつ．その際に，自らの考え方や基盤としている理論そのものを批判的に見つめることが，批判的な内へのまなざしといえる．省察的実践では，他者との関係における複雑な役割を理解するために，自らの姿勢や使用理論，価値観，前提，先入観に疑問をもつ自省（reflexivity）の重要性が言及されている（Bolton2014）．ここからも，スーパービジョンの役割の広がりが，省察的実践家の育成に寄与しているといえる．

２．スクールソーシャルワーク・スーパービジョンへの適用の可能性

これまでの考察をふまえ，SSW 実践において，省察的実践を促進するスーパービジョンの可能性を提示していきたい．具体的には，①省察的実践家の育成，② SSW 実践システムの変革・確立，③省察を促進する環境づくりの３点があげられる．

まず，①省察的実践家の育成という点からみていくと，最初に指摘してきたとおり，学校現場でひとり職種であるということが，SSW 実践における大きな特徴である．ゆえに，SSWer が省察的実践家として実践できることの意味は大きい．そのためのスーパービジョンに求められることは，SSWer が省察を深める力を育成し，SSWer が自分のなかのスーパーバイザーになるよう支援していくことである．

従来の SSW のスーパービジョンでは，アセスメントやプランニングを含むソーシャルワークの方法理解や実践力の向上，教育現場という特性をふまえた理解，理論・価値・知識・技術の充足不足への気づきと修正・補充する力の向上などが行われている（鈴木ら2015：186）．SSWer が実践の力を向上させ，実践で活用できるレパートリーを蓄積していくうえで，これらの内容は重要である．それに加えて，省察的実践家を育成していくためには，スーパービジョンのなかで，「なぜ」を問いながら，省察する姿勢を身につけていく必要があろう．また，スーパーバイジーのどのような価値観や実践理論が行為を導いたのか，他に代替案はなかったのかを検討することで，批判的省察の力を養うことも重要となる．これら実践レパートリーの蓄積と批判的省察を含めた省察の力の獲得が，省察的実践家として実践で機能する SSWer の育成に貢献すると考えられる．

次に，② SSW 実践システムの変革・確立に関して，現在，わが国の SSW のスーパービジョンでは，管理的機能の発展を重視する声が多いことをすでに指摘してきた．その背景には，SSWer 活用事業が開始されて10年というなかで，まだ効果的な SSW 実践の体制やシステムが十分確立していないことがあげられる．これまでの10年が，SSW 実践の認知度を高め，それぞれの土地で効

果的なミクロ・メゾの実践を模索してきたとすれば，今後は，各地域に即した実践システムを確立することが求められる．そしてそのために，教育委員会と協働したシステム構築をしていくことが，スーパービジョンの大きな役割として期待されている．

このように，スーパービジョンにSSW実践システムの変革・確立が求められるなかで，教育委員会という組織やSSWerの置かれた状況に対する省察，特に批判的な視点で組織を捉える批判的省察は，重要な意味をもつと考えられる．それは，これまでのシステムの維持ではなく，SSWerの実践をふまえながら，より効果的かつ組織的に実践できるシステムへと変革することにつながっていく．特に，スーパービジョンにおける変革の役割においては，すべての雇用者が協働し，共同で展開する特徴が示されている（Lymberyら2007）．このことからも，スーパービジョンをとおしてSSWerが自身の所属する組織について省察し，変革に参加・協働していくことが不可欠と考えられる．

最後に，③省察を促進する環境づくりは，現在のSSWのスーパービジョンであまり重視されているとは言い難いであろう．それは，そもそも学校・教育現場で，SSWerの省察的実践がまだ浸透していないためである．しかしながら，省察的実践には，それを理解し，受けとめる文化や環境が重要である．そのためスーパービジョンには，省察的実践についての理解を浸透させることや，省察する機会を設けることなど，省察や省察的実践を可能にするような組織への働きかけが求められる．同時にスーパービジョンには，スーパーバイジーが安心して実践のなかでの不安や疑問を表出化できる環境づくりが不可欠である．それこそが，省察を促進するスーパービジョン関係の構築につながっていく．

こうした省察的な思考の喚起と，それを可能にするスーパービジョン関係の構築や組織づくりへの参画によって，省察的実践家としてのSSWerの育成が進展すると考えられる．

３．スクールソーシャルワークにおけるスーパービジョン実施の課題

現在のSSW実践状況をみると，都道府県教育委員会から要請のあった学校へ直接派遣する形態や市町村教育委員会あるいは県内の各教育事務所への配置，学校への配置など，派遣・配置の形態はさまざまである．また市町村教育委員会や教育事務所に配置されたSSWerも，拠点校型，巡回型，派遣型などの多様な形態で実践を行っている．このように多種多様な派遣・配置形態があるなかで，省察を促進する環境づくりを担う管理的機能の遂行には，課題があるだろう．

一つは，私立学校など学校独自でSSWerを雇用している場合を除き，基本的にSSWerの管轄は学校でないため，学校という組織のなかでの環境整備という管理的機能の役割を果たすことは困難である．また，スーパーバイザーに関しても，市町村単位で設置しているところもあるが，多くは県の教育委員会から大学教員等が派遣される．そのため，スーパーバイザーとスーパーバイジーの所属が異なることも多々あり，所属が違うスーパーバイザーによる管理的機能の遂行という課題がでてくる．こうしたSSWのスーパービジョンの現状で，教育的機能が中心になっていることは想像に難くない（鈴木ら2015；門田ら2013）．そしてそれは，省察を促進するハード面の整備に関与しづらいことを示している．

このような現状を鑑みると，SSWerを配置する管轄単位でスーパーバイザーを配置することが最善ではあるが，現実的には困難さが伴う．そのため，たとえば各都道府県教育委員会がスーパービジョンの機能を明示し，周知を図ることで，市町村教育委員会や教育事務所がスーパーバイザーの管理的役割を理解していく必要があるだろう．また，派遣される学校に対しては，SSWerが所属する教育委員会ないしは教育事務所が，スーパーバイザーの助言を得ながら，学校に対する働きか

けを行っていくことが求められるであろう．

Ⅴ　おわりに

本稿では，SSW 実践における省察的実践の重要性から，それを促進するスーパービジョンの可能性に着目してきた．そして，スーパービジョン機能の整理・分析をとおして，スーパービジョンが省察的実践家の育成に寄与できることと，省察を促進する環境づくりの役割を担っていることを示してきた．また，SSW 実践のなかで省察的実践を促進するために，スーパービジョンに求められる内容や視点を示してきた．

しかし本稿では，その具体的展開や方法までは提示できていない．そこで今後は，省察的実践を促進するスーパービジョンの方法を探究していくことが課題となる．それにより，省察的実践の発展やソーシャルワーク実践での定着に寄与していきたい．

本研究は，JSPS 科研費15K17222の助成を受けたものである．

注：

1）日本学校ソーシャルワーク学会が2010年に実施した調査では，ソーシャルワーク領域の専門職をスーパービジョン体制に位置づけている自治体は，10.2％程度であった（山下ら2012：212）．

2）本表は Hawkins（2013：62）をもとに，筆者が邦訳し作成した．

3）本図は Weld（2012：13）をもとに，筆者が邦訳し作成した．また，本図は教育的機能に特化したものではないが，Weld のモデルはスーパービジョンをとおしたスーパーバイジーの学びを重視しているため，教育的機能の側面が強いと考えられる．

4）本表は Hawkins ら（2012：64）をもとに，筆者が邦訳し作成した．なお，表２の発達機能は教育的機能，援助機能は支持的機能，質的機能は管理的機能に該当する．

文献：

Bassot, B.（2016）*The Reflective Practice Guide*, Routledge.

Beddoe, L. & Davys, A.（2016）*Challenges in Professional Supervision: Current Themes and Models for Practice*, Jessica Kingsley Publishers.

Beverley, A. & Worsley, A.（2007）*Learning and Teaching in Social Work Practice*, Palgrave Macmillan.

Bolton, G.（2014）*Reflective Practice : Writing and Professional Development*, SAGE.

Brockbank, A. and Mcgill, I.（2007）*Facilitating Reflective Learning in Higher Education*, Open University Press.

Brookfield, S.（2009）“The concept of critical reflection : promises and contradictions” *European Journal of Social Work*, Vol.12 No.３, 293-304.

Davys, A. M. & Beddoe, L.（2009）“The Reflective Learning Model : Supervision of Social Work Students” *Social Work Education*, 28（８）, 919-933.

De Haan, E.（2012）*Supervision in Action : A Relational Approach to Coaching and Consulting Supervision*, Open University Press.

土井幸治（2011）「全国自治体調査からみえるスクールソーシャルワーワーカーの配置状況の実態」『学校ソーシャルワーク研究（報告書）』日本学校ソーシャルワーク学会.

Gray, M. & Webb, S. A.（2013）*The New Politics of Social Work*, Palgrave Macmillan.

福山和女編著（2005）『ソーシャルワークのスーパービジョン-人の理解の探究-』ミネルヴァ書房.

Hawkins, P. & Shohet, R.（2012）*Supervision in the helping professions*, Open University Press.

Howe, K. & Gray, I.（2013）*Effective Supervision in Social Work*, SAGE.

Ingram, R., Fenton, J., Hodson, A. & Jindal-snape, D.（2014）*Reflective Social Work Practice*, Palgrave.

Ixer, G.（2016）“The concept of reflection : is it skills based or values ? ”*Social Work Education*, 35（７）, 809-824.

Johnson, L. C. & Yanca, S. J.（2010）*Social Work Practice : A Generalist Approach*, Allyn & Bacon.

門田光司・富島喜揮・山下英三郎・山野則子（2012）『スクール（学校）ソーシャルワーク論』中央法規.

門田光司・鈴木庸裕・半羽利美佳ほか（2013）「SSW事業の動向資料　スクールソーシャルワーカーに対するスーパービジョン体制の動向調査結果の概要」『学校ソーシャルワーク研究』8,81-84.

Kadushin, A. & Harkness, D.（2014）*Supervision in Social Work*, Columbia University Press.

加藤由衣（2016）「スクールソーシャルワークにおける省察的実践の意義：省察的実践の特性分析から」『高知県立大学紀要』65,43-57.

Knott, C. & Scragg, T.（2013）*Reflective Practice in Social Work*, SAGE.

空閑浩人（2012）『ソーシャルワーカー論-「かかわり続ける専門職」のアイデンティティ-』ミネルヴァ書房.

Lymbery, M. & Postle, K., ed.（2007）*Social Work : A Companion to Learning*, SAGE.

南彩子（2007）「ソーシャルワークにおける省察および省察学習について」『天理大学社会福祉研究室紀要』９，３-16.

宮嶋淳（2016）「スクールソーシャルワーク・スーパービジョン・システムに関する実証的研究」『中部学院大学・中部学院短期大学部　教育実践研究』１，189-198.

文部科学省（2016）『スクールソーシャルワーカー活用事業実施要領（平成28年４月改正）』

文部科学省 教育相談等に関する調査研究協力者会議（2017）『児童生徒の教育相談の充実について～学校の教育力を高める組織的な教育相談体制づくり（報告）』

Moon, J.（2004）*A Handbook of Reflective and Experiential Learning : Theory and Practice*, Routledge Falmer.

日本学校ソーシャルワーク学会（2016）『全国におけるスクールソーシャルワーカー事業の実態に関する調査報告』

Noble, C., Gray, M. & Johnston, L.（2016）*Critical Supervision for the Human Services: A Social Model to Promote Learning and Value-based Practice, Jessica* Kingsley Publishers.

太田義弘・中村佐織・石倉宏和編著（2005）『ソーシャルワークと生活支援方法のトレーニング』中央法規.

大友秀治（2016）「ソーシャルワーク・スーパービジョン研究に関する近年の動向（その２）：実証的研究に着目して」『学校ソーシャルワーク研究』11,54-68.

Ruch, G.（2000）“Self and social work: towards an integrated model of learning”, *Journal of Social Work Practice*, 14（２）, 99-112.

Ruch, G.（2002）“From triangle to spiral: ref ective practice in social work education, practice and research” *Social Work Education*, 21（２）, 199-216.

Ruch,G（2005）“Relationship-based practice and reflective practice: holistic approaches to contemporary child care social work”, *Child and Family Social Work*, 10, 111-23.

Schön, D. A.（1983）*The Reflective Practitioner*, Ashgate.

須藤八千代（2009）「ソーシャルワーカーを導く知」杉本貴代栄・須藤八千代・岡田朋子編著『ソーシャルワーカーの仕事と生活－福祉の現場で働くということ－』学陽書房.

鈴木庸裕編著（2015）『スクールソーシャルワーカーの学校理解』ミネルヴァ書房.

植田寿之（2015）『日常場面で実践する対人援助

スーパービジョン』創元社.

渡部律子（2016）「ソーシャルワークにおける省察的実践とソーシャルワーカー養成-ソーシャルワーク教育の課題と展望を考察する-」『ソーシャルワーク実践研究』４，ソーシャルワーク研究所，16-30.

Weld, N.（2012）*A Practical Guide to Transformative Supervision for the Helping Professions: Amplifying Insight*, Jessica Kingsley Publishers.

Wilson, G.（2013）"Evidencing Reflective Practice in Social Work Education: Theoretical Uncertainties and Practical Challenges", *The British Journal of Social Work*, 43, 154-172.

Wonnacott, J.（2012）*Mastering Social Work Supervision*, Jessica Kingsley Publishers.

Wonnacott, J.（2016）*Developing and Supporting Effective Staff Supervision*, Pavilion Publishing.

山辺朗子（2015）『ジェネラリスト・ソーシャルワークにもとづく社会福祉のスーパービジョン－その理論と実践』ミネルヴァ書房.

山野則子（2010）「スクールソーシャルワークの役割と課題－大阪府の取り組みからの検証」『社会福祉研究』109，10-18.

山野則子編著（2015）『エビデンスに基づく効果的なスクールソーシャルワーク－現場で使える教育行政との協働プログラム－』明石書店.

山下英三郎・内田宏明・牧野晶哲（2012）『新スクールソーシャルワーク論』学苑社.

Yip, K.（2006）"Self-reflection in Reflective Practice : A Note of Caution" *British Journal of Social Work*, 36, 777-788.